23 イングリッシュ・ガーデン

イギリスの人たちの花好きは、相当なものだ。私の住んでいる高台の住宅地は、どの家も、きれいな庭をつくっている。天気のいい日に庭を見てまわると、それぞれの家の人たちの趣味がうかがえて楽しい。バラづくりに情熱を燃やしている人、ヒースに凝っている人、ハンギング・バスケットのうまい人、小さな草花だけを好んでいる人。これだけ個人の園芸の水準が高いと、プロの腕を発揮しなければならない植物園は、本当にたいへんだと思う。

イングリッシュ・ガーデンと一口に言っても、大きく二つの流れがある。ひとつは、フォーマル・ガーデンと呼ばれるもので、きちんと手をかけていて、やや幾何学的な雰囲気をもつ庭園だ。これは、どちらかというと、貴族の邸宅に伴う場合が多い。それに対して、一般の民家などで広く採用されているのは、できる限り自然の雰囲気を生かし、幾何学性を排した、自然風の庭園だ。決してコンクリート・ブロックを積み上げたりせず、アルミの柵でまわりを囲ったりせず、古びた石や煉瓦を使い、アイビーをはわせたりする。石や煉瓦を自然な雰囲気で積み上げた壁は、植物にもなじみがよく、虫たちにも格好のすみかを提供してくれる。私は、この自然風の庭園が好きだ。

実は、日本の自宅の狭いスペースを使って、私もイングリッシュ・ガーデンづくりを進めている。梅雨や夏の高温多湿と虫害があり、管理が楽ではないのだが、それよりもむずかしいのは、規則性を排して自然な雰囲気をつくることだ。うっかりと花を植えると、すぐに規則的になってしまう。自然な配置を保ちながら、高さや色のバランスをよくするのは、かなりのセンスを要することだ。幾何学的に花を植えるほうがよっぽど楽であることを、実際にやってみて痛感した。

最近では、日本でも、イングリッシュ・ガーデンが人気だ。イギリスを旅行して、黒く塗られた柱と白壁のコントラストを背景に、あざやかな色彩のハンギング・バスケットがかけられている光景をみると、息をのむ思いがする。だが、美的感覚というのは、複雑なものだ。イギリスの園芸雑誌に、最近の流行に関する記事がのっていた。それによると、ハンギング・バスケットは、はや

ハンギング・バスケットで飾られたパブ (1996 年 7 月 13 日撮影、著作権フリー)

りではないものの中にはいっており、「パブの飾り」というコメントがついていた。パブなどであまりにも多用されたために、イメージが悪くなってしまったのだろう。

一方で、イギリスのガーデン・ショーなどでは、日本庭園が人気だ。5 年ほど前に見たときには、「ボンザイ」のコーナーの鉢の中に妖精の飾りが置かれていたりして、思わず頬がゆるんだのだが、最近は立派な盆栽ばかりが並んでいる。日本庭園も本格的なものが紹介されており、イングリッシュ・ガーデンに与えている影響も大きい。鮮やかな色をおさえて、緑を基調に落ちついた雰囲気を演出するという方向だ。

結局、私たちがイングリッシュ・ガーデンを美しいと思うのは、イギリスの人たちが日本庭園を美しいと思うのと同じで、ある面では異質なものへのあこがれにすぎないのだろうか。そして、イングリッシュ・ガーデンをまねようとしている私の姿勢は、世界の庭園が個性を失いつつある方向を、さらに進めているにすぎないのだろうか。その結論はともかくとして、庭園ひとつを取り上げてみても、お互いの文化を客観的に評価することが、どれほどむずかしいか

伝統的な家屋の外観 **(1991** 年 **8** 月 **6** 日撮影、著作権フリー**)**

がわかるのではないだろうか。イギリスの園芸の最近のトレンドは、外来の要素をできるだけ抑え、使い古された手法を排することのようである。

1996　新納泉　　著作権フリー